

2019年  
7月号

## “ありのまま”で居れる場所



林寺小学校から大通りを挟んだところに5軒連なる長屋がある。築81年の木造二階建て。その左端の1軒に、市原さんご家族が住居兼店舗として暮らし始めたのは、この春。

ドアを開けると、大きな木製テーブルや焙煎機、壁際の棚にはコーヒー豆やおしゃれな雑貨たちが並び、年月と共に色濃く変化した柱、新しく張り替えられた木材の壁、それらの共存が、なんともワクワクした気分させてくれる。

夫の祐也さんは、「カフェ」という場所が好きで、いつかは自分のお店を持ちたいと思っていた。理想の“リノベーションしたカッコいい空間”探しの中で、長屋のリノベーションを多数手がける建築家の吉永さん出会い、その夢が実現した。



このまちにゆかりはなかったが、都心に近く大通りに面している好立地、内装を好きに変更できるという条件から“ここだ”と決めた。



限られたスペースに店舗と住居を両立させるための吉永さんのアイデアが随所に光る。入口から裏庭まで続く“通り土間”や、高い天井からいくつも吊るされた電球が空間に広がりを見せている。

また、カフェ部分とプライベート空間との間には、壁ではなくすりガラスを設けたことにより、光が通るとともに、お店にしながらお子さんの気配を感じとれる空間が出来上がった。

「新しい木材が古くからの木材に馴染んでいく過程が、娘の成長と共に楽しみだ」と祐也さん。世代を問わず気軽に立ち寄れるコーヒー店として、このまちに溶け込んでいくのだろう。



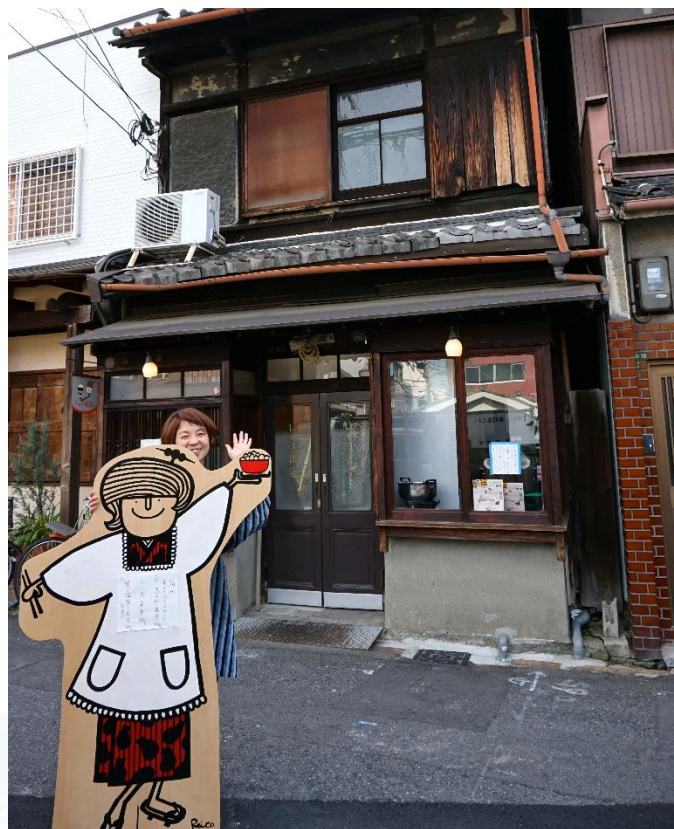
▲「大阪市地域魅力創出建築物修景事業」の補助金を利用し、古き良き長屋の外観が蘇りました。

2019年  
8月号

## 懐かしさと温もりのある食堂

弥栄神社のほど近くにある木造の小さなご飯屋さん。2年ほど前からここでお店を営むのは店主の首藤さん。「食堂がやりたい」と周囲に話していたら、「好きそうな所があるよ」と、この物件を教えてもらった。歴史を感じる建物とガラス扉に一目惚れし、ここに決めた。

以前はうどん屋さんだったこの場所。扉を開けてすぐのテーブル席やカウンター席がある土間部分はそのまま使えたが、奥の座敷は壁も床も痛みが激しかったため、全面的にリノベーションすることに。1階の天井を取っ払いつくった吹き抜けにより、2階の窓からの光が白い壁にやわらかに反射し、開放的な空間となった。



▲ お店の外観。首藤さん自作の看板とともに。

扉に描かれたレトロな文字、色濃く変化し味わいのある柱、ガラスシェードに覆われた電球。そして、流れるエーエムラジオ、着物とかっぱう着の首藤さん、定番の「だし巻き卵定食」。これらが調和した空間に、思わず時代をさかのぼったような不思議な錯覚に陥る。

「思い出したときにちょっと寄りたくなるような食堂でありたい」。そう話す首藤さんには、4人のお子さんがいる。慌ただしい日常の中でも、この空間に身を置けば、自然と自分らしくなれるそうだ。

なぜか懐かしく、あったかいご飯のある場所が、ここにはある。



▲ 飾らないお人柄の首藤さん。  
着物のご祖母から譲り受けたもの。



▲ 一見普通の民家。この看板が目印です。  
店名は首藤さんのお名前から。

2019年  
9月号

## つながり、広がる場所



北巽駅から徒歩5分ほどの住宅街の中、静かにたたずむカフェがある。ここは、店主の長谷川さんが、マンションの1階部分を借り、3年前にオープンさせた店。間口は広くはないが、店名の黒文字のロゴと、白壁に映えるグリーンや雑貨が訪れる人を迎える。

もともとは、喫茶店だったこの店舗。傷みのあった床を全面的に張り直し、ハイカウンターを設けた。店内の壁は白を基調としつつも、広いキッチン周りには深いグリーン、グレー、ブルーが配色されている。時間を過ごすことができる。

落ち着いた色合いにもかかわらず、店内が明るい印象なのは、日当たりのよい立地であることが計算されているから。店の奥にはソファ席があり、素敵な大人の雑貨に囲まれて、ゆったりとした時間を過ごすことができる。

長谷川さんは、結婚を機に遠方からこの地に越してきた。親しい知り合いがいない中、3人の子を産み子育てに追われる日々。そんな中、近くで赤ちゃんを抱っこしてでも、気楽にいけるオシャレなカフェがあったら、と感じていた。もともとカフェ経営に興味のあった長谷川さんは、この物件と巡り合ったとき、その思いを乗せた。

店内には、手作りとは思えないほどハイセンスな大人なアクセサリーや、赤ちゃんグッズが並ぶ。これは、近所に住むママたちの作品。もちろん販売もされている。「自分でお店を構えるのはハードルが高いけど、ここで少しでも可能性が広がるんだったら」と長谷川さん。



ここでは、ワークショップやイベントも積極的に行われている。この店を通じて人のつながりが少しずつ広がっていく。そう願っていた長谷川さんだからこそ、人を温かく柔らかに迎える雰囲気がここにはある。

